

お世話になった地域の課題を知り貢献したい！

今年4月から高等部の生徒たちは、探究活動と作業学習を掛け合わせた『鶴南版プロジェクト型の作業学習(Project Based Learning : PBL)』に挑戦してきました。

第1弾は、「校長の窓(vol.9)」で紹介しましたが、作業学習の展開に探究活動を重ねていくイメージで取り組みました。今回の第2弾では、学校のある地域の探究からスタートし、そこで生じている課題の解決のために作業学習で培った力を役立てていくイメージで取り組みました。

具体的な取組の様子につきましては、「長崎新聞」の記事をご覧ください。

生徒たちには、第1弾の時よりも、プロジェクト協力者(自治会の皆さん)との「対話型会議※」を重視した学びを体験させることができました。対話の中では、お互いを知るため相互理解も促され、プロジェクトに対する生徒の本気の度合い(コミット度合い)が高まるなどの効果も得られました。

価値ある成果の一つとして、地域での活躍が認められ、生徒自身の満足度も得られ、自分と地域とのつながり(コミュニティ・ウェルビーイング)について考える良いきっかけにもなったのではないかと考えています。そのことは、生徒たちのコメントからもうかがえました。

次年度も、新たなプロジェクト協力者を開拓し、この教育実践を追求していきたいと思えます。

※「対話型会議」とは、お互いの背景(意見・感情・価値観など)を理解しあうことで、新しいアイデアを生み、また合意形成を行っていく会議のこと。

ゴール
価値ある
成果

ウェルビーイング

・・・「こころ」の充足率 100%

(成長確認アンケート)サービス班 7/7名中

※サービス提供日当日:2名欠席

- ・ 人の役に立つ経験ができて良かった。
 - ・ そうじをすることで役に立ったと思った。
 - ・ 人の想いを聞いて行動に移すってやりがいがあると思った。
 - ・ 地域の困りごとを聞き取ることをがんばった。
 - ・ 晴海台の方とのかかわりの中で、「できること」がたくさんあると思った。例えば、窓掃除、お話しする、公演のごみ拾い
 - ・ 晴海台の方と楽しく話したり、仲良くなれたりしたことは嬉しかった。
 - ・ 相手に分かりやすい説明ができた。
 - ・ 急に振られても「さおり織り」の説明をすることができたことで、自分が思ったよりできることが多いと思った。
 - ・ 相手に見やすい資料が作れた。
 - ・ 話し合いの中で聞きながらメモを取ることができた。
 - ・ 掃除道具の名称を質問され、答えることができた。
 - ・ コミュニケーションは苦手だけどしゃべることができた。
 - ・ // 苦手だけどけっこう関わるすることができた。
- ・ 晴海台の方に少し恩返しできたかなと思います。

もっと自由な発想と挑戦を楽しむ境地で鶴南の教育を創る

- 「R6 年度 学校運営方針」でめざす! -

地域総合

長崎・鶴南特支高等部



住民と一緒に窓を清掃する鶴南特支高等部の生徒
＝長崎市、晴海台ふれあいセンター

ぴかぴかの窓で地域へ恩返し

長崎市蚊焼町の県立鶴南特別支援学校高等部の生徒が、近くの晴海台ふれあいセンター（同市晴海台町）を清掃した。学校がある地域への「恩返し」として、培った技術や経験を生かし、窓をぴかぴかに磨き上げた。

高等部の生徒が園芸や工芸、サービスなど6班に分かれて学ぶ作業学習の一環。生徒と晴海台地区の住民は海岸のごみ拾いなどを通して交流し

ていたが、新型コロナウイルス禍で途切れていた。今年、生徒から「お世話になった地域の課題を知り貢献したい」という声が上がった。探究活動と作業学習を組み合わせた「プロジェクト型作業学習」に取り組むことにした。ふれあいセンター運営委員会や自治会、老人会などに所属する住民6人と、「サービス班」の生徒9人が11月に集まり、意見を交わした。生徒は住民から日常の困り事などを聞いて学校に持ち帰り「清掃で窓の高い所が届かない」という

学んだ清掃技術生かす

声に応えることを決めた。清掃は今年4日に実施。「サービス班」は、特別支援学校生の技術を認定する県独自の「キャリア検定」などを通して、清掃の技術や周囲に対する配慮などを学んでいる。柄の長いボールなど専用の道具を用い、高い場所にある窓もきれいに吹き上げた。住民は生徒に教わりながら、声を掛け合って清掃に汗を流した。「勉強になった」「また力を貸してほしい」と生徒に感謝していた。高等部3年の中山翔太さん(17)は「地域の方と掃除をするのは初めて。喜んでもらえてうれしい」と表情に達成感をにじませた。

(柴崎優衣)